「幸いになれる」

詩篇１：１－４
January.5.2025

詩篇１：１－４（パワポ）

Preface

元旦礼拝に引き続き、今年の主題聖句詩篇１篇の御言葉を分かち合っていきたいと思います。
もし元旦礼拝の説教をお聞きになれなかった方がおられましたら、めぐみ教会のホームページからお聞きになれますので、一度お聞き頂けますと幸いです。

元旦礼拝で、詩篇１篇は、聖書６６巻すべての内容を要約したものであるとも言えるような洪大な内容を含んでいる神の言葉であるということ、また、神さまが私たち人間に下さった幸せ・幸いについての処方箋のような御言葉だということを確認致しました。
そして、その処方箋の内容は、聖書と親友になること、神の言葉である聖書の言葉と親友になることこそが、神が提示して下さった人にとっての幸いであると確認致しました。

Part One

神の言葉がで聖書として書き残された根本的な理由を考えてみますと、天地万物を創造する中で、私たち人間を特別にどの被造物とも違う唯一神のかたちにお造りなさった神と言われるお方が、私たち人間が不幸せ・不幸ではなく、「幸せを、幸いを生きて欲しい」と思っておられるということだと思います。
聖書が私たちに語る大切な事実としてあるのが、「人は幸いを得ることは出来る」、「あなたがたは幸せを生きることが出来る」ということです。

例えば、戦後からバブル経済が崩壊するに至るまで、日本社会全体が考えていただろうと思われる幸いとは、豊かになること、物質的に豊かになることだったと思います。ところが、実際に豊かになってはみたものの、変わらず空しさや不安が付きまとってしまう、いつどうなるのか分からないという茫漠とした恐れのようなものが無くならない。却って、物質的な豊かさに囲まれてみて、何が幸せで、何が不幸なのかが良く分からなくなってしまった。
または、人や状況によって違う、ころころ変わる表面的な幸いを装った多種多様さに溢れているこんな時代・世界にあっては、「幸せになれる、幸いはある」という語り掛けそのものが、もしかしたら、怪しい、陳腐に聞こえてしまうかもしれません。
ですが、聖書は、「幸いは可能だ」と、「幸せはある」と、事実として語ってくれます。

元旦礼拝で、私には小さい頃から色々な夢があり、その夢の内容を振り返って見ますと、「夢が叶ったら幸せになれる」という思いだったとお話ししましたが、人は誰でも最初は、幸せを捜し当て、その捜し当て手に入れた幸せを守り、持続させることが出来る

と、考える傾向があるように思います。
　自分たちには、他の人と違うなんか秘訣のようなものがあって、意外と簡単に願っている幸せを手に入れることが出来ると、若い時分には思いがちな気が致します。
　すみません、未だに若造ですが、今よりももっと若い時の私自身もそうでしたし、皆さんも、思い当たる節があるのではないでしょうか？
　「ほら、あの中年のオヤジたちやおばさんたちを見てみ！　あの人たちは道を間違えたんだよ。　アホみたいだよ。　あの人たちは、幸せが何なのかが分かっちゃいなんだよ。　でも、俺は知ってるよ。　俺には、あの人たちには分からない見えていない秘訣のようなものが見えてるから！　だから僕は、必ずや、幸せというものを手に入れてみせるさ！」というところから、誰もが始めるのではないでしょうか。

　でも、そこからそんなに時間が経たないうちに、「幸せを探し出し掴むということが、考えていたよりもそんなに簡単なことではない」ということに気付き始めます。
　そしてさらに進むと、「この世の中にあって、本当に掴み取るのが難しいことがあるとすれば、それこそ正に、幸せだ」ということを悟るようになるでしょう。
　で、その次の段階は何でしょうか？
　落胆、または、悲観、絶望かもしれません。
　イエス・キリストというお方を知らないと、「平和？　完全な平和？　この世界で？いや、そんなの有り得ないから」、「幸い？　完全な幸い？　そんなの不可能でしょ…」というような状態に、人は陥ると言いましょうか、落ち着いてしまう、落ち着こうとしてしまうでしょう。

　でも、このような反応は、事実に即していない反応ではないと思います。
　世の中に最もたくさん溢れているのは人の言葉だと思いますが、人の言葉を紡いで出来た文学の世界においても、偉大な文学書と言われるものは、人間活動、人間世界における落胆、悲観、絶望という悲劇を物語ります。
　去年、ノーベル文学賞を取ったハン・ガンさんの作品もそうですね。
　では、なぜ、人は悲劇を物語るのか？
　人生とは悲劇だからですね。
　人生はバラ色ではないということは、少し生きれば、誰もが気付きます。

　正月になると毎年、箱根駅伝がテレビで放映されますが、小さい頃、「せっかくのお正月でお年玉も貰えるし、美味しい物も食べられるし、会いたかった家族や親戚にも会える何だか楽しい気分なんだから、テレビだって、笑って楽しめる面白いテレビ番組だけ放送してくれればいいのに、何で二日間にも渡って、朝７時から午後の遅い時間まで、全然つまらない駅伝なんか放送してくれちゃってるんだろう。勿体ないよ。しかも、あれを素晴らしいとか、面白いとか、感動したとか言ってるんだから、意味分からない」と思っていました。
　ところが、大人になって、結婚して、家庭をもって、働いて、それなりに人生の波に揉まれてから箱根駅伝を見ますと、面白くてたまらないですし、感動しますし、涙なしには見られなくなりました。

そこに人間ドラマといいましょうか、いつのまにか、悲喜こもごも人の悲哀が感じられてしまうようになっちゃっていました。
しかも、使徒パウロ先生の「走るべき道のりを走り終え、信仰を守り通しました」（Ⅱテモテ３：７）なんていう聖書の言葉が、頭の中を巡ったりして、色んな感情が心の中で行き交いながら、涙がこみ上げてきます。

涙を堪えながら箱根駅伝を見ている私のその横で、子どもたちが、「何であんな詰まんないの見てるの？　チャンネル変えてよ」とぶつぶつ言っていますが、それに対して私は、「お前たちも大人になって、見てみたら分かるよ。一生懸命に走って、繋いで、生きている姿に、涙が出てくるようになるから」と返します。

私たちの周りには、「人生はバラ色ではない、悲劇である」という証拠が散在しているように思います。
この事実こそが、人間という生き物（息もの）において最も大きな問題であり、探求すべき事柄なんだと思います。
私たち人間が、幸いを探し求めているということ自体が、今現在、悲劇の中にいるという裏返しになると思います。
そして、多くの人々は、悲劇の中を揉まれているうちに、「完全な幸せは不可能なものである」という結論に至ってしまうように思います。
文学でも、人の悲劇の行き着くところとして、人の死を描いて終わります。

Part Two

終わりと言いましたが、それでも、ここでさらに進むと今度は、冷たく醒めた笑い、冷笑、あざ笑い、ニヒル、ニヒリズムに至るのではないのかなあと思うのです。
「人生？　それが何？　あまり幸せになり過ぎてもいけないし、あまり悲惨になり過ぎてもいけない。ただやれるだけ、そっと過ぎ去れば良いだけさ。　水がこぼれたからと悲しむこともないし、何かに希望を持つこともないよ」と、冷めたように皮肉ってしまいます。
でも、そう言っている深いところでの思いは、「素晴らしい人生でありたい。幸いだと言いたい。　幸せを噛み締めたい。　幸福があるということが、本当はあきらめきれていない」という裏返しでもあるように思います。

旧約聖書の伝道者の書でも、「空の空、空の空、すべては空。すべては空しい」と、世が空しいということに賛同しているかのようなことを言っていますが、その真意は、「この世界、この人生、すべて、何もかもが空しい」ということを言いたくて、そう言っているのではなく、「ある意味、空しいのは事実だけれども、それで終わりじゃないんだよ！　大事なのは、そう思えてしまうのは、あなたの人生において、忘れてはならないものを忘れているからなんだよ。　最も重要なお方、天地万物を創造され、あなたをお造りになられた神と言われる愛なるお方を差し置いているから、空しいんだよ！」ということを言いたいわけですね。

伝道者の書１２：１２－１３（パワポ）

そして、

詩篇１：１－３（パワポ）
幸いなことよ。主のおしえを喜びとし、昼も夜も、その教えを口ずさむ人。
その人は、流れのほとりに植えられた木。
時が来ると実を結び、その葉は枯れず、そのなすことはすべて栄える。

「この世界にあって、幸いはある」と、「冷淡に、悲観に、落胆に、諦めに生きる必要のない道があるんだよ！　完全な平和、この悲劇が散在している世界にあって、完全な平安、幸いがあるんだよ！」と、私たちは神から語り掛けられております。

神なき、キリストなき世の落胆と悲観と絶望、または冷笑に対する最も偉大な抵抗の言葉を詩篇１篇に見つけることが出来ます。
「幸いはある」と、「幸いな人はいる」と、「人は幸いであれる」と。
「人は、神の言葉とともに、初めて幸いであれる」と教えてくれます。

Part Three

聖書は、私たちに、「私たち人間がなぜ幸いを探し得ることが出来ないのか」ということについて、ずっと語り掛けて下さいます。
つまり、「幸いを探し求める方法が間違っているがために、完全な幸いを得ることが出来ない」と教えてくれます。

人は、「幸せを手にしてみせる」と言って、旅立ちます。
その方法も知らずにです。
幸いを得る正しい方法を知らずに進むならば、始めから、間違った道に踏み出すしかなく、結局、間違った終着点へと辿り着くしかなくなってしまうでしょう。
簡単な問題です。
真っ当な方法を知り、その真っ当な方法用いればいいだけのことです。
聖書は、「こうすれば、幸いになれるから」ということについて、明らかに提示して下さいます。

私たち人間がしてしまいがちな「間違っている幸せ探し」の内容は、周囲の環境や状況を良くしようと、自分に備わった条件を良くしようと、そういう類のものに依存しているという点だと思います。
「お金があり、日当たりが良ければ幸せだけれども、お金を失ってしまっても、日が当たらなくなっても、私は幸せでいられるだろうか？　あんな風になれれば幸せだろうになあ。　でもそうならないで、逆になっちゃったら、僕は絶対に幸せになれない。」
人間の考える人間的な幸せは、状況や繰り広げられる出来事や事件に依存してしまいますが、幸いとは、条件や環境に依存するものではないと、聖書は教えて下さいます。

そして、もう一つ、聖書が教えてくれる知恵に満ちた事実は、「幸いとは、決して、幸い自体を目的にして得られるものではない」ということです。
即ち、幸いとは、他のものが作り出す産物だということです。
「幸いを求める者は、幸いである」なんていうことは、ひと言も聖書は言いません。
「悪しき者のはかりごとに歩まず、主のおしえを喜びとし、昼も夜も口ずさむ人は幸いである」と教えて下さっている通りです。
この幸いな人の最も大きな特徴は、幸いを求めて生きていないということです。
これこそ、聖書が、私たちに教えて下さる知恵の核心ですね。
もし、幸いを探し求めて、そのことを目的に生きるならば、その人は決して、願い望んでいる幸いを手に入れることは出来ないことでしょう。
決してです。
これこそ、詩篇１篇が私たちに教えてくれる最大の神の知恵だと思います。
マタイの福音書にあるイエス様の言葉を見てみましょう。

マタイの福音書５：６（パワポ）

「幸いに飢え渇く者は幸いです」とは、イエス様ひと言も仰っておりません。
「義に飢え渇く者は幸いです。その人たちは満ち足りるからです。」
幸いを求めて、あっちに行き、こっちに行くことに努めている人ではなく、義に飢え渇く、つまり、「神の義、義なる神を求めることに努めている人が、幸いに至る」と仰います。
さらに６章の御言葉を見てみましょう。

マタイの福音書６：３１－３３（パワポ）

「飲むこと、食べること、着ること、住まうことに幸いを求めても、あなたがたは、決して幸いに至ることは出来ません。　あなたがたは真っ先に、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、飲むこと、食べること、着ることでは至ることの決して出来ない幸いを得ることが出来ます」と仰います。
「目的にすべきことを目的にしなさい、食べること、飲むこと、着ることは目的ではなく、神の国と神の義を求める手段に過ぎません。　順序を逆に、あべこべにしてはいけません」と仰います。

この世の中がなぜ悲劇なのか、なぜ私たちの人生が悲劇となってしまうのか、それはただ一つ、「幸いを目的とし、神の国と神の義を目的とせず、飲むこと、食べること、着ることを目的としてしまっているからだ」と、「飲むこと、食べること、着ることで叶えようとしている幸いでもない幸いもどきのために、神を利用しようとしているからだ」と、イエス様教えて下さいます。

幸いを求めても、私たち、幸いに至ることは出来ません。

幸いを求めれば求めるほど、幸いは、私たちを避けて避けていくことでしょう。
「幸せを見つけた、幸せを手に入れた」と思ったその瞬間、その幸せはあぶくとなって消え去ってしまうことでしょう。
あぶくですから、シャボン玉の玉のように、手にした瞬間、形がいびつになりり、やがて破裂して消えて無くなることでしょう。

Part Four

聖書は語ります。
「あなたがたは、幸せについて、最初から間違った求め方をして来たんだよ。幸せそのものが幸せなのではなく、幸せとはいつも、他のことの間接的な結果として表れるものなんだよ。
そして、いつでも、幸せと言われるものよりもはるかに大きいことが作り出す副産物なんだよ。」
要するに、幸いとは、二つのことに依存しているということです。
神、またそのお方の義と、私たちがどう関係しているかに完全に依存するということ。
そしてもう一つは、私が置かれている環境や出生や条件ではなく、私のたましいの、私の霊の状態に完全に依存しているということです。

幸いとは、私たちに起こる出来事や事件やイベントや事象という私たちの周りのことに関わっているのではなく、私たち自身（私自身）に掛かっているということですね。
同じ牢獄の中に居ても、一方は、泥沼の地面に目を落とし、一方は、目を上げ、天の星の美しさを見上げる。
イエス様と同じように十字架に架けられた二人の死刑囚、同じ苦しみの中にあっても、一方は、イエス様とともに神の義によるパラダイスをその心に抱き、もう一方は、ただひたすらに、幸いと言えるだけの条件や環境が一切整っていない最悪の十字架上だと決めつけて、その状況をイエス様に向かって、また人々に向かって、そして、自分自身に向かって、のろいの言葉を並べ立てるだけでした。
私たちが、皆さんが、神と言われるお方とどのような関係にあるのか、そして、その方の内にあって、私という人はどういう人なのかということを見つめることが、幸いのよしあしを決めるということですね。

Conclusion

最後に、私という人の外の条件や状況に依存しない本当の幸い、私という人が神とその方の義との関係において幸いを味わい、実感している人の姿を記録ししている聖書箇所を見て、終わりたいと思います。

使徒の働き１６：１９－３４（パワポ）

イエス・キリストを宣べ伝えていただけなのに、重犯罪を犯した人よりも厳しく取り締まられ、迫害され、何度も鞭打たれ、虫の息になっているにもかかわらず、それでも情け容赦なく足かせがはめられ、牢獄の中でも最も冷たく、暗い奥の牢にまで入れられ

て、気絶したように眠っていた使徒パウロとシラスの二人。

死んだような深い眠りから夜中に目が覚めて、なおも暗く、なおも冷たく、体中痛みに苛まれながら、不自由な厳しく酷い拘束という条件や状況という面において、これ以上最悪な状況はないとも言えるようなその中で、パウロとシラスは、神に祈りながら、やがて、喜びの歌、感謝の歌である賛美を神に献げました。

彼らの心に、霊に、体中いっぱいに溢れていたのは、幸いです。
イエス・キリストにある罪の赦しと、永遠の滅び・死よりの救いと、天の御国という、新しい天と新しい地に神の子として入るという言葉では到底表現できない恵みを受けたという事実と、その事実をもってしてある神との関係、なおも神の義のために生きる、神の義に飢え渇くということゆえの幸いを実感しておりました。

なので、突然、激しい地震が起こって、牢の扉が開き、鎖が外れてしまうという、最悪の状況を脱するための外的条件が整っても、その場に何食わぬ顔、いやむしろ、平安な顔をしてその場に留まります。
なぜか？
外的条件や状況によらない幸いな人だったからです。
むしろ、彼らが持っている神の国と神の義による幸いを、まだその幸いを知らない看守とその家族たちに、まことの幸いを分かち合いました。
「主イエスを信じなさい。そうすれば、あなたもあなたの家族も救われます」という幸いを知らせました。
そうして、３４節の最後の言葉。

使徒の働き１６：３４（パワポ）
神を信じたことを全家族とともに心から喜んだ
幸いに、幸いを重ねるかのような幸いを味わいました。

皆さん、私たちの幸いは、私たちの外にはありません。
私たちの内に、私たちの内が神と、イエス・キリストとどう繋がり続けているのかということに掛かっています。

だからこそ、御言葉です。
だからこそ、聖書の言葉です。
御言葉なるイエス様にあって幸いを頂く唯一の道が、聖書の言葉を昼も夜も口ずさむことです。

私たち皆が、御言葉により頼む幸いな人でありたいと願います。

お祈りいたします。
祝祷：詩篇１：１－２